

平成21年度学校体育振興事業
「中学校武道必修化に向けた地域連携指導実践校」
研究報告書

学校名	ちくぜんちょうりつみわちゅうがっこう 筑前町立三輪中学校
-----	---------------------------------

校長名：石井保幸

所在地：福岡県朝倉郡筑前町久光 1600

電話番号：0946-22-2231

地域の指導者と保健体育担当教員が連携した指導の在り方に関する研究

I 研究実践校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

筑前町は、福岡県の筑紫平野の北部に位置し、人口約3万の農村地帯である。近年は、福岡都市圏や久留米広域圏に近接しているという立地条件を背景に、宅地開発が進み、子ども増の傾向が見られる。地域や保護者の学校教育への関心は高く、PTA活動は盛んである。一方、核家族化が進行する中、子ども同士の対人関係が希薄化し、礼節や道徳性、あるいは規範意識など、相手との関係の中で培われるはずの能力や態度が十分育っていない実態がある。

2 学校の概要（平成21年5月1日現在）

	1年	2年	3年	特学	計	
学級数	4	4	4	2	14	
生徒数	男	74	59	78	2	213
	女	66	79	73	4	222

教員数 27名（保健体育科 2名）

武道の授業の状況

領域；武道 領域の内容；柔道

	1年	2年	3年	特学	計	
配当時間	0	13	0	13	13	
配当教員数 (外部指導者)	0	1	0	1	1	
生徒数	男	0	45	0	1	45
	女	0	60	0	0	60

領域；武道 領域の内容；剣道

	1年	2年	3年	特学	計	
配当時間	0	13	0	13	13	
配当教員数 (外部指導者)	0	1 (7)	0	1	1 (7)	
生徒数	男	0	15	0	1	15
	女	0	20	0	0	20

II 研究の内容及び成果

【研究成果の要点】

地域の有段者（以下、外部指導者）を活用した授業づくりを行うためには、まず、授業者自身が明確なビジョンをもち、外部指導者に提示できるようにしておく必要がある。次に、できるだけ多く人材を確保したい。剣道初心者子どもには、防具装着段階からマンツーマンでの指導を必要とする。有段者に限らず、剣道経験者まで幅広く協力を求めたい。さらに、外部指導者と生徒の関係づくりが重要である。今回は、授業初登場時に、名前や職業、指導歴などを簡単に紹介したのみで個に応じた指導を充実させるためには、お互いをもっと知る取組が必要だった。課題も多かったが、多くの外部指導者と接した生徒たちは伝統文化である剣道の奥深さと対人競技の面白さを体感したようである。

1 研究主題等

(1) 研究主題

地域の指導者と保健体育担当教員が連携した指導の在り方に関する研究

(2) 研究主題設定のねらい

本研究は、校区内に在住する地域のスポーツ少年団を指導する剣道指導者に着目し、彼らを地域の教育力として、学校教育における武道指導に活用できないものかという発想からスタートした。

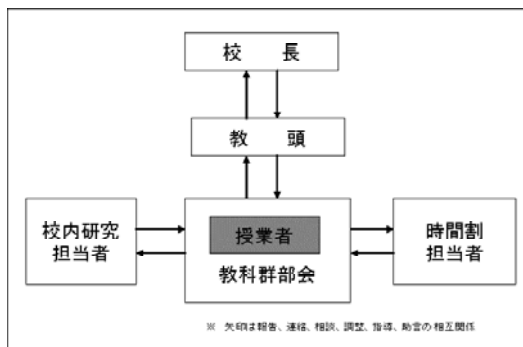
これが実現できれば、外部指導者とのチーム・ティーチングや小集団学習が可能となり、個に応じたきめ細かな指導を行うことが

でき、剣道の魅力を生徒たちに伝えることができる。さらに、これを機会に、技術指導を超えた部分で、生徒と外部指導者の交流が深まれば、外部指導者の生き方に接することになり、生涯スポーツへの意欲を高めることに繋がるのではないかと考えた。

そこで、剣道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重して練習や試合ができるようになるために、外部指導者との連携による授業の在り方を探る。

(3) 取組体制

本研究は下図の通り、校長中心の組織のもと、校内研究の一環として実施した。



(4) 主な取組

平成21年度	①平成21年7月 ・研究構想
	②平成21年8月～9月 ・単元構想 ・外部指導者との連絡調整 ・授業準備及び指導案作成
	③平成21年10月～11月 ・実証授業の実施
	④平成21年11月～12月 ・研究のまとめ

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 具体的な研究課題

- ① 武道の必修化に向けた基本的な剣道の授業づくりはどうあるべきか。
- ② 個に応じた指導を行うために外部指導者

をどのように活用するか。

(2) 取組

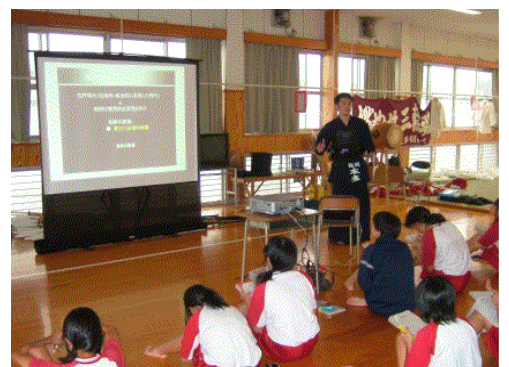
① 剣道への興味・関心を高める工夫

まず、授業導入時に、様々な対人ゲームを体ほぐしの運動として実施した。力を競うゲームとして「腕相撲」、「足相撲」、タイミングを競うゲームとして「指相撲」「尻相撲」、「手押し相撲」、力とタイミングを競うゲームとして「腕立て姿勢による腕相撲」、「帯相撲(写真1)」、予測や決断力を競うゲームとして「ジャンケンたたき」を行った。

さらに、剣道専門の大学教授を招聘して講話(写真2)をいただいた。プレゼンに見入る生徒の姿と刀に触って喜ぶ生徒の姿が印象的だった。



【写真1：帯相撲の様子】



【写真2：大学教授の講話様子】

② 剣道のイメージを高め、技能構造を理解させる工夫

自作のVTRや絵図などの視聴覚教材を作成し、単元の各段階で提示した。

絵図は、応じ技の打ち方等を示した等身

大のものを壁に設置した。VTR は、剣道部員をモデルとして、剣道の基本動作である「立礼」、「座礼」、「蹲踞」、「中段の構え」、そして「面、小手、胴の基本の打ち方と受け方」、「かかり練習」、「試合稽古」などを収録した。

③ 自ら学ぶ姿勢を育てる工夫

単元の 13 時間の学習計画や毎時間の活動を自己評価できるような学習カードを作成した。特に、授業内容の 25 項目を自己評価できるカードを準備し、単元の節目で活用した。ただし、時間の都合上、記入は時間外の活動とした。

④ 基本動作を習得させる工夫

毎時間、基本動作を身に付ける活動として、ボール打ち（写真3）、ラダーによる足さばき（写真4）、基本の打突（写真5）、送り足を使った打突（写真6）を4つ提示して、準備運動と兼ねてサーキット的に行った。生徒たちは班毎に、ローテーションしながら、それぞれの動きを習得していった。



【写真3：ボール打ち】



【写真4：ラダーによる足さばき】



【写真5：基本の打突】



【写真6：送り足を使った打突】

⑤ 外部指導者の活用の工夫

次の3点を外部指導者導入の意図として、協力を依頼した。

- ・生徒の個人差に対応する支援
- ・指導者集団（組織）による指導
- ・多様な学習活動、学習形態への対応

今回の外部指導者は、次の6名で全員が経験豊富な有段者である。

指導者	性別	年齢	段位	職業
A	男	70	7	無職
B	男	50	7	公務員
C	男	34	6	公務員
D	男	32	6	会社員
E	男	45	5	会社員
F	男	45	4	会社員

外部指導者との事前協議（写真7）で授業協力の具体的な内容について、次の5つの内容を確認した。小集団学習の流れを示すこと（写真8）、防具の着脱を指導する

こと（写真9）、技の手本を示すこと（写真10）、歴史や特性を伝えること、竹刀や練習場の安全確認を行うことである。



【写真7：事前協議の様子】



【写真8：小集団学習の流れを示す様子】



【写真9：防具の装着を手伝う様子】

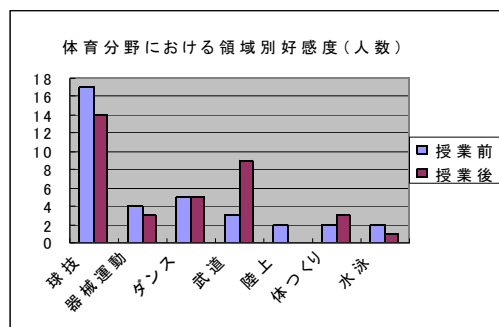


【写真10：技の手本を示す様子】

(3) 成果・課題

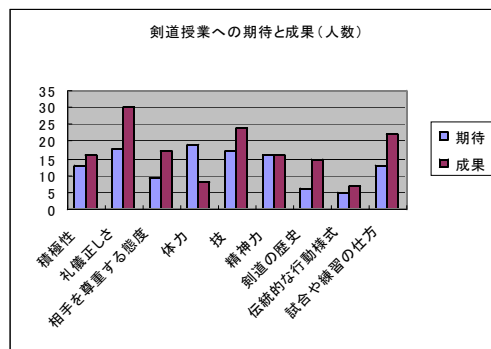
① 成果

グラフ1は、授業前後の生徒（36人）の意識の変容を表したものである。授業前は、一番好きな運動として武道をあげた子どもは3人だったが、授業後は9人に増加した。また、授業前は13人が、武道を好きな運動の上位3位までにあげていたのに対し、授業後は28人に増加した。



【グラフ1：一番好きな運動領域】

さらに、グラフ2は、生徒が感じている授業への期待と授業後の成果を表したものである。ほとんどの項目で期待以上の成果を感じており、特に、「礼儀正しさを期待した生徒が18人だったのに対し、30人が成果と実感している。また、「相手を尊重する態度」は9人から17人に伸びている。これは、剣道のねらいである剣道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重する態度が身につけてきたことを証明するデータと言える。しかし、「体力」の向上に関しては、期待に反して、その成果をあまり感じていない生徒が多かった。



【グラフ2：剣道授業への期待と成果】

このような生徒の変容は、地域の有段者や大学教授などの外部指導者の協力によるところが大きい。技能向上はもちろん、異世代交流により、伝統文化のもつ独特の奥ゆかしさを感じ取ったのではないかと思う。また、授業者自身も、このような生徒の変容を見るに付け、剣道が人間教育の可能性を秘めていることを改めて確信することになった。

生徒の授業後の感想

- ・剣道の授業では、分からない時にすぐに教えてくれて安心して授業ができました。またいろいろな先生からほめてもらったので楽しくできました。(A子)
- ・たくさんの先生方に来ていただいて剣道の歴史や礼儀がよく分かりました。教えてもらった礼法など生活に生かしていきたいと思います。(B男)

② 課題

ア 課題解決型学習には無理があった。

自ら課題を見付け、課題解決する学習形態は、馴染まなかった。剣道の特性として基本的な内容の段階的習得が求められることから、一斉指導による系統学習に終始することが多かった。

イ 外部指導者を生かしきれなかった。

本研究は、外部指導者の活用の仕方を探ることが主テーマだった。つまずきに対する指導や小集団学習での役割等を示すことはできたが、外部指導者の力量を十分に生かしたとは言えない。お互いに遠慮があったことは否めない。

ウ 生徒と外部指導者の対人関係を深める取組が不十分だった。

これは外部指導者の先生からの声である。例えば、生徒に外部指導者の「プロフィール」を提示したり、外部指導者に担当するグループや個人の情報を提示し

たり、コミュニケーションの場を設定したりするなどお互いを知る工夫が必要だった。また、思い切って「〇〇先生グループ」など小集団の固定化等の工夫があれば、さらに対人関係は深まったのではないかと思う。

3 研究成果の普及

本研究は、本校の校内研究の一環として実施した。本校の研究テーマは「生徒指導の視点に立った授業づくり」。本研究のテーマとは異なるものの、授業改善を目的とするところは共通するところである。研究授業後の授業整理会では、「練習と稽古の違い」、「武道指導の初期段階で小集団学習は有効か」など武道教育の特性に着目する質問が多く出た。また、外部指導者の熱心さに触発されて、積極的に学習する生徒の姿を見て、地域連携の事業を称賛する声が多く聞かれた。今後は、研究の成果を武道領域から球技やダンス等の領域へ拡大すると共に、他教科や地域の教育研究会へとその成果を発信したいと考えている。

4 今後の展望

「黙想」のかけ声で訪れる「静」と、竹刀の音やかけ声が響きわたる「動」の入り交じる授業を生徒たちはどう受け止めたか。事後調査では36人中13人が「満足」、19人が「まあまあ満足」と答えており、多くの生徒が成果を実感している。これは、外部指導者の授業協力の成果であり、地域社会との連携の有効性が証明されたものと判断できる。

今回、防具の手配、外部指導者の確保、時間割調整、外部指導者の協力可能日の確認、外部指導者の所属長宛派遣依頼、礼状作成等、周辺活動に終始追われた。今後、地域連携を日常的に推進していくためには、雑務から授業者をいかに解放するかを検討する必要がある。例えば、外部指導者リスト作成、外部指導者代表を窓口とした連絡調整の一本化などの工夫で、本事業がスムーズに展開されることを期待する。

資料 1

生徒に配付した「各学年で取り扱う剣道学習内容」表。表中の○は実施、△は一部実施及び復習として実施、無記入は実施しないことを示す。

各学年で取り扱う剣道学習内容

学 習 内 容			1、2年	3年
知 識	剣道の歴史、特性		○	
	礼法（立礼、座礼）、作法（正座、黙想、蹲跪他）		○	△
	竹刀、防具等の名称		○	
	防具の着脱、納め方		○	△
基 本 動 作	自然体、中段の構え		○	△
	足さばき（歩み足、送り足、踏み込み足、継ぎ足）		○	△
	素振り	正面	○	△
		上下、斜め、跳躍		○
	基本打ち（面、胴、小手）		○	○
	劈割り合		△	○
切り返し			○	
対 人 的 技 能	し け げ 技	二段の技	○	○
		小手一面、面一胴		○
		面一面、小手一胴		○
		払い技	○	○
	出 ば な 技	払い面、払い小手	○	○
		払い胴		○
		出ばな面、出ばな小手	○	○
	引 き 技	引き面、引き胴	○	○
		引き小手		○
	応 じ 技	抜き技	○	△
		面抜き胴、小手抜き面		○
		面抜き面		○
すり上げ技		○	○	
小手すり上げ面			○	
面すり上げ面			○	
返 し 技	面返し胴	○	△	
	小手返し面		○	
	胴打ち落とし面		○	
試 合 の 仕 方	打ち落とし技		○	
	胴打ち落とし面		○	
合 審 判 法	試合の仕方	△	○	
	審判法	△	○	

資料 2

単元の節目で活用した「出来栄え評価表」。時間の都合上、記入は時間外の活動とした。

自分の出来栄えを評価をしよう

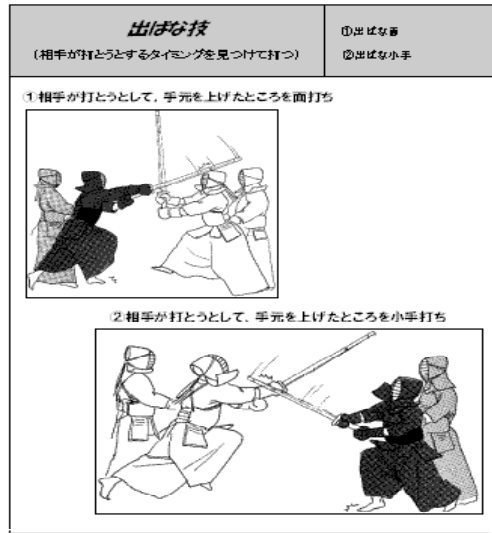
剣道は、防具の準備や片づけに多くの時間がかかり、自己評価を毎時間行うことができません。そこで、授業時間外に評価を行ってもらいます。よく指示を聞いて、記入忘れがないようにしましょう。評価は、3：よくできる、2：だいたいできる、1：あまりできないの3段階で行います。

評 価 項 目	1回目	2回目	3回目
基 本 動 作	① 作法として、正座、黙想ができる。		
	② 礼法として立礼や座礼ができる。		
	③ 自分で面、胴、小手、垂れを装着できる。		
	④ 防具をきちんと片づけることができる。		
	⑤ 中段の構えができる。		
準 備 運 動	⑥ 竹刀でボールをリズムよく叩くことができる。		
	⑦ ラダートレーニングで足さばきがスムーズにできる。		
	⑧ 正面打ちと胴打ちを連続して打つことができる。		
	⑨ 送り足、踏み込み足を使って面、胴打ちができる。		
基 本 技	⑩ 大きく振りかぶって面打ちができる。		
	⑪ 手首を使って速く小手打ちができる。		
	⑫ 刃すじ正しく胴打ちができる。		
対 人 的 技 能	⑬ 攻めのフェイントをかけて技をだすことができる。		
	⑭ 小手一面、面一胴の二段打ちができる。		
	⑮ 相手の竹刀をはらって面や小手が打てる。		
	⑯ 相手の竹刀を返して面や小手が打てる。		
	⑰ つばぜりあいから引き面、引き胴が打てる。		
	⑱ 相手の竹刀をかかわして面や胴が打てる。		
精 神 的 要 素	⑲ 互角稽古で積極的に技をだすことができる。		
	21 打ち込み稽古で姿勢正しく技をだすことができる。		
	22 係り稽古で連続して技をだすことができる。		
	23 真剣な気持ちで稽古や試合をしている。		
	24 相手に感謝の気持ちを持って稽古や試合をしている。		
25 相手の上達を願って、アドバイスをしている。			
合計点・・・今の自分の出来栄えは何点だろう？			

資料 3

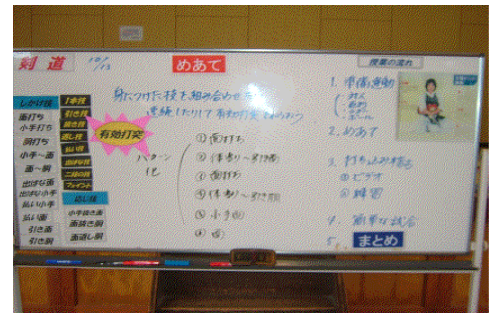
視聴覚教材として、練習場の壁に貼り付けた等身大の技の解説の絵図。「応じ技」、「二段の技」や「引き技」などの絵図も掲示した。

剣の極意（其の貳）



資料 4

10 時間目の授業の板書。ボードの中央に、めあてを記入し、左側には、これまで学習した技の種類、右側には、授業の流れを示した。



資料 5

単元終了後の全体写真。生徒たちの正座姿が凛々しく印象的だった。

